

**[成果情報名]** モモの摘果時期およびせん定程度の違いによる核割れ果防止

**[要約]** 早生、中生品種におけるモモ核割れ果の発生軽減のためには、満開後50～70日頃の硬核期における果実肥大を抑制する弱せん定や仕上げ摘果の遅延（満開後60日頃）が有効である。

**[キーワード]** モモ、「白鳳」、「日川白鳳」、核割れ果、摘果、弱せん定

**[担当機関名]** 果樹試験場かき・もも研究所 **[連絡先]** 0736-73-2274

**[部会名]** 果樹

**[分類]** 指導

### **[背景・ねらい]**

モモの核割れ果は早生、中生種での発生が多く、日持ち性が悪く、甘味も少ないことから果実品質の評価を下げる原因となっている。これまでの調査結果から核割れ果の発生を軽減するには、硬核期の5月下旬から6月上旬（満開後50～70日頃）の急激な果実肥大を抑制することが必要であるとされていることから、仕上げ摘果時期の遅延および弱せん定の効果について検討する。

### **[成果の内容・特徴]**

1. 「白鳳」の仕上げ摘果を慣行摘果時期より20日遅らせる後期摘果区では、硬核期の急激な肥大を抑えられる（図1）。
2. 「白鳳」の仕上げ摘果時期を遅らせた後期摘果区では果実はやや小さくなるが、核割れ果の発生は20%程度軽減できる（表1）。
3. 「日川白鳳」の仕上げ摘果時期を慣行摘果時期より15日遅らせることにより果実は小さくなるが、核割れ果の発生は10%程度軽減できる（表2）。
4. 「白鳳」において弱せん定（新梢の50%程度をせん定）により、慣行せん定（新梢の70%をせん定）に比べ硬核期の肥大がやや抑えられる（図2）。
5. 「白鳳」において弱せん定により慣行せん定に比べ果実はやや小さくなるが、核割れ果率は10%程度軽減できる（表3）。

### **[成果の活用面・留意点]**

1. 本技術は核割れ果の発生の多い園で実施するが、樹勢の弱い園では小玉傾向になるので実施しない。
2. 後期摘果と弱せん定を組み合わせることにより、核割れ果の発生をさらに軽減されると考えられるが、樹勢低下、果実肥大等への影響についてさらに検討が必要である。

[ 具体的データ ]

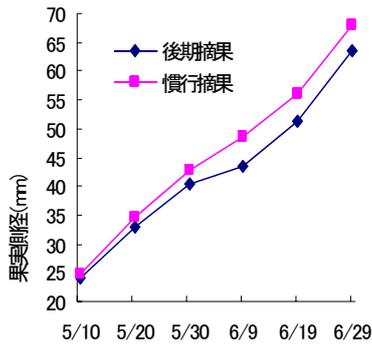


図1 白鳳の摘果時期と果実肥大(2007年)  
後期摘果区(仕上げ摘果6月9日満開後60日)  
慣行摘果区(仕上げ摘果5月21日満開後40日)

表1 摘果時期と果実品質(2007年)

処理区	果実重 (g)	核割れ果率 (%)
後期摘果区	251	41.7
慣行摘果区	275	66.7

供試品種 白鳳10年生(かき・もも研究所内)  
処理区 後期摘果区(仕上げ摘果を満開後60日後)  
慣行摘果区(仕上げ摘果を満開後40日後)  
反復数 各区3樹

表2 摘果時期と果実品質(2006年～2007年)

処理区	実施年度	果実重 (g)	核割れ果率 (%)
後期摘果区	2006	219	24.4
	2007	240	73.6
慣行摘果区	2006	243	34.4
	2007	257	83.3

供試品種 日川白鳳10～11年生(現地)  
処理区 後期摘果区(仕上げ摘果を満開55日後)  
慣行摘果区(仕上げ摘果を満開40日後)  
反復数 各区3樹

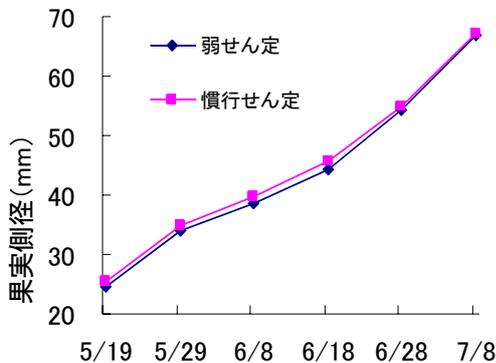


図2 白鳳のせん定程度と果実肥大(2006年)  
弱せん定区(新梢の50%程度をせん定)  
慣行せん定区(新梢の70%程度をせん定)

表3 せん定程度と果実品質(2005年～2007年)

処理区	実施年度	果実重 (g)	核割れ果率 (%)
弱せん定区	2005	212	3.4
	2006	226	16.7
	2007	262	60.0
慣行せん定区	2005	220	11.8
	2006	248	26.7
	2007	262	75.0

供試品種 白鳳8～10年生(かき・もも研究所内)  
処理区 弱せん定区(新梢の50%程度をせん定)  
慣行せん定区(新梢の70%程度をせん定)  
反復数 各区3樹

[ その他 ]

研究課題名：モモ核割れ果防止技術の開発  
予算区分：県単独事業  
研究期間：平成17～19年  
研究担当者：西谷 公男 木村 学  
発表論文等：なし

